




前世は剣帝。 今生クス王子 1

A L P H A L I G H T

アルト
alto



アルファライト文庫 



ウェルス・メイ
ラインツェル

ラインツェル王国の
第二王子。
グレリアとは
友人関係にある。

グレリア・ヘンゼ
ディストブルグ

ディストブルグ王国の第一王子。
兄妹の中でファイとは
特に仲がいい。

フィリップ・ヘンゼ
ディストブルグ

ディストブルグ王国の現国王。
評判が悪い息子のファイを
気に入っている。

メフィア・ツヴァイ
アフィリス

アフィリス王国の姫。
性格は勇猛果敢、
あるいは猪突猛進。

ファイ・ヘンゼ
ディストブルグ

主人公。ディストブルグ王国の第三王子。
前世は^{なつ}剣帝、と讃えられた剣士ながら、
今生では^{なつ}クズ王子、と擲^{なげ}論される程の
ゲータラ生活を送っている。

フェリ・フォン
ユグステイス

ディストブルグ城のメイド長にして、
ファイ専属の
世話役を務めるエルフ。

第一話 クズ王子

生きる為に剣を執り、剣に殉じた男。

それが正しく俺を表す言葉だ。

手にはいつだって剣を握る感覚がある。

手を上げると剣を振ってしまいたくなる。欲求が僅かに湧いてしまう。それ程までに、

俺の人生は剣と共にあった。

だけれど、今生の俺は剣を振るわない。振るっていない。

俺が剣を手にしていた理由は、剣を振らなければ自分が死んでしまうから。剣を執らなければ生きられない人生だったから。喰わねば、己が喰われる世界だったからだ。

幼少の記憶なんて殆ど残っていない。

それでも、かつての俺は――

『……ははっ、あはははははははは』

常に笑っていた。

どんな時でも、ひたすら、馬鹿みたいに笑う。

淡々と笑うのだ。たとえそれが、本意でなからうが。それが、俺が先生から受けた教えの一つ。

お前は表情が分かりやすいから常に笑え、と言われていた。だから実践した。剣を執る時は決まって、俺はひたすら、へらへらとした笑みを浮かべていた。そしてもう一つ。

先生は常にある言葉を言っていた。

『人間同士で殺し合う事が悲しいんじゃない。剣を執る必要性がある事自体が、悲しい事だよ』

必要があれば俺はまた、剣を執ろう。

でも、必要がないのなら、剣を執る事はないだろう。

だって俺は——

『なあ、***。剣を執る事は、死が付き纏う事を意味するのさ。剣を執らない事はその逆だ。もし、仮に次の人生があるのなら、剣を執らないで済む人生を歩みたいよな』

そう言つて、笑顔で死んで逝つた先生の教え子なのだから。

さあ、朝が来る。

生きる為に剣を執り、剣に殉じた男の人生とは異なる生だ。剣を執る必要性がない平和な人生。

できる事ならば、この生活がずっと続きますように。

剣を振るう事こそが誉れとされる世界で、先生以外の誰にも理解されない想いを抱く。

目を覚ませと自分の中の何か言ってくる。

それと共に、ゆさゆさと、俺の身体を揺すっているような感覚がやってくる。

「……か。……んか。……殿下!!」

「……ああ、起きた。今起きたから揺するのやめてくれ。酔つてゲロブチまける五秒前だ」

「以前もそう言つて、一人でゲロしたいからと私を追い出した途端に二度寝を始め、夕方起床してきたお方のお言葉は信じるに値しません」

「はあ、いいだろうが。寝る子は育つ。俺はまだまだ育ちたいんだ」

「殿下ももう一四歳です。王子としての自覚をもつと——」

俺が起きた元凶であるメイド——ラティファからの耳の痛い話から顔を背け、剥がれた毛布を被り直す。

王子、なんて肩書きはあるが、俺は第三王子。

しかも側室の子で、王位継承権は第四位だ。

はつきり言つて王になれる可能性なんてものは、〇・一%よりも少ないだろう。

そんな俺に王子としての自覚云々を説く必要があるのかと一度ラティファに聞いたところ

ろ、そういう話じゃないんです！ と数時間説教されたので、黙っておくのがここでの正解だ。

「聞いてるんですか!? 殿下!! いい加減にしないと……」

いい加減にしないと、なんて言葉はとくに聞き飽きている。

どうせただの脅し文句だ。軽く聞き流せばいいだろう。

今日の起床予定時刻は夕方の方の四時。恐らくまだあと八時間近くある——おやすみなさい。

「——メイド長呼びますよ」

「っ!?」

ビクッと身体が本能的に動く。

この王宮のメイド長。俺がアイツだけは苦手なのを知っていて、ラティファは言っているのだ。これは腹黒メイドと言わざるを得ない。一度とて認められた事はないが、父上世話役のチェンジを申し出てみた方が良くもしいれない。

『では、私が務めさせて頂きましょう』

しかし、ラティファの代わりにと挙手をするメイド長の姿が脳内に浮かび上がり、俺は即座にその考えを撤回した。

やっぱラティファが良いかな。あはは……

「脅しじゃありませんよ殿下！ 今日陛下が殿下を含めた王子王女全員に召集をかけ

てるんです。殿下が起きないと言うのであれば、本当にメイド長呼びますからね！」

「……珍しいな」

毛布にくるまったまま、ちょこんと顔を出す。

こうして王子としてかれこれ一四年間生きているが、墮落し切った生活ゆえに付けられた陰のあだ名は、クス王子。

そんな俺まで召集される機会というのは、今回を含めまだ三度目だ。

「どうにも、隣国の戦況が芳しくないよう……」

「せんきょう?」

ついで、素っ頓狂な声もれた。

基本的に、庭でゆっくりする、寝る、食べる、湯船に浸かる、この四つの行為で完結している俺は、世間の情報にかなり疎い。隣国が戦争中なんて事も、今初めて知った程だ。

「……殿下。私の言いたい事、分かりますよね?」

「……わ、分からない。こ、困ったなあ……皆目見当がつかないやあ」

「はああああ……」

それはそれは、大きなため息だった。

だって仕方ないじゃん。興味ないし、隣国なんて俺からしてみればどうでもいいし。

「あのですね殿下。お隣のアフィリス王国と我が国は、古くから親交があるのは流石にご

存知ですよね」

「あの勝気な王女がいる国だろ。兄上に勝負を挑もうとしていたあのイノシシみたいな王女。俺が参加したパーティーは少ないからな。小さい頃の事だが覚えている」

そう言ったところで、ラティファの顔がずいっと俺の目の前に現れる。

「間違っても！ 隣国の王女殿下をイノシシなどと言わないように！！」

「じ、じゃあ猪突猛進な王女って事で……」

「変わってませんよー！！」

「ええええ……」

「ため息吐きたいのはこっちです、もう……」

がつくりと肩を落とすラティファ。

だつて仕方ないじゃん。

剣はどういうものなのか。

どういふものが付き纏うものなのか。

それを理解せずにひたすら直進するようなヤツを、どう言い表せばいいのやら。イノシシと形容したのも褒めてもらいたいくらいだつてのに。

先生なら間違ひなく、死を運ぶ、死神、だつて言つただろうな。何故なら俺もそう思うから。先生の思考と俺の思考はかなり酷似していた。俺の自慢の一つだ。

「まあ、隣国が大変な事になつてるのは分かった。でもなんで俺まで呼び出すんだ？ 王子王女なんて不必要だろ絶対。特に俺とか」

「それはですね」

母親が出来る悪い子供に言い含めるように、ラティファは仕方なさそうに口を開く。

「我が国とアフィリス王国の間で——」

「失礼します」

ガチャリと。

まるで計つたかのようなタイミングで、聞き覚えのある声が響く。

「ラティファ、後は任せた」

俺はくるまっていた毛布を脱ぎ捨て、慌てて窓へと向かう。

その間〇・二秒。

施錠された窓を開錠——する前に、部屋のドアが押し開けられた。

「お迎えに上がりました、殿下」

現れたのは、ラティファと同じメイド服を着た女性。

相貌を見る限り、二四歳のラティファよりも若い印象を受ける。

「出たな年齢詐欺妖怪ババア！！」

「女性に対する言葉遣いではありませんね。ちなみに、窓の鍵には細工をさせて頂いてい

「開かねえし!! くそ!! 昨日まで開いてただろちくしょうが!!!」
「まだ時間もあります。少し、教育をしましょうか」
「怖ええよ!! ちょ、ラティファ助ける!! 俺の世話役だろ!! ここで役に立つんだラティファ!!」
「微力ながら協力させていただきます、メイド長」
「あらあら、ではお願いしますね」
「裏切るの早ええよ!!」
彼女こそは、俺の苦手な相手の一人。
メイド長こと、フェリ・フォン・ユグステイヌ。
周囲の者からはフェリさんか、メイド長と呼ばれているエルフだ。
メイド長との出会いは遡ること八年前。人混みが嫌だからと平日頃パーティーへの参加を避けていた俺に、一人のメイドが話しかけてきた事から始まる。
メイド服を着た少女が道に迷ってしまい、パーティー会場に辿り着けなくなったと尋ねてきたので、俺は仕方なくパーティー会場に向かったのだ。
純粋無垢に映ったその少女が、実は俺をパーティー会場に連れていこうと画策した者の一人とは、つゆ程も思っていなかった。



「謀が俺にバレた時の、てへつとはに candid 少女の顔は、今でも忘れられない。当時は、可愛くて少しおっちょこちよいな少女のする事だ、目を瞑ろうと思った。が、蓋を開けてみれば、実際は一〇〇歳近いババアなのだという。俺はその日から、メイドという生き物全てを信じられなくなった。そんな回想をしている間に、俺はガッチリとラティファに拘束されていた。よし、やっぱりコイツは世話役から外してもらおう。忠誠心のカケラもねえよコイツ。『そうですね、まずは私の事はフェリオ姉さんと呼んでもらいましょうか』

「誰が呼ぶかババア」

「ふんっ」

バシンツといい音をさせるピンタが掛け声と共に飛んできた。

「いったあああああ!?!!」

「最近は聞き間違いが多くて不便です。さ、気を取り直してどうぞ」

「それは歳のせいだな。ババアの耳が遠くなるのは仕方ない事だぞ」

「……………」

バシ、バシンツと更に力のこもった往復ピンタがまた飛んでくる。

「ふっ!?」

「……………もういいです。陛下への生贄に捧げましょう」

「わ、分かっているのか！俺に手をあげたらどうなるのか!!」

このまま生贄に捧げられるのも癪だったから、三下じみたセリフを吐き捨ててみる。仮にも俺は王子なのだ。一介のメイドが俺に手をあげたらどうなるか……

「殿下をお連れする際、多少の傷には目を瞑ると許可を頂いていますので、ご安心を」

「クソ親父いいいいいいいい!!」

「因果応報です。ほら、行きますよ」

「待って！オフトウン！俺のお布とおおおおん!!!」

首根っこを掴まれた俺は、必死に抵抗したものの、一〇〇年近く生きるババアの腕力には手も足も出なかったのだった。

第二話 行きたくない

「やっとなおったか、ファイ」

「来たって言うより引きずられてきただけですけどね」

ファイ・ヘンゼ・ディストブルグ。

それが、クズ王子と名高い俺の名前であり、今しがた俺をそう呼んだ中年の男性こそ、

父上にして王であるフィリップ・ヘンゼ・デイストブルグだ。

「悪態を吐く癖は相変わらずか」

父上は呆れまじりにそう言つて、床に座る俺に視線を向けたまま、僅かに目を細める。俺を連れてきた張本人はといえば、隣で直立不動に佇んでいた。

「私の教育不足です。申し訳ありません」

フェリの声は、不思議とよく響く。エルフだからだろうか。そこはいつも謎に思つていた。

「いや、フェリは十分この国に尽くしてくれている。お前を責めたくて言ったわけではないのだ。気にする必要はない」

「はっ」

「して、ファイ。お主を呼んだのは他でもない。一つ、役目を与えようと思つてな」

「役目、ですか。失礼ながら父上。この「クズ王子」に務まる役目があるとは到底思えないのですが」

自分で自分をけなすのは今に始まった事ではない。

ゆえに、父上が、俺の発言を気にする様子は見受けられない。

「確かにそうかもしれん」

「なら——」

「しかし、それも言つていられない事情があるのだ。盟約を、反故にする事はできん」

「……盟約？」

「そうだ。盟約なのだ。我々デイストブルグ王家と、アフィリス王家の間で交わされた盟約。内容は、どちらかが窮地に陥つた際は必ず王家の者が駆けつけるといふものだ」

「ならば——」

兄上達がいるではありませんか。

「そう俺が言う前に、父上が手で制する。」

「此度の戦況はあまり芳しくはない。しかも、相手側には「英雄」がいるときた」

「英雄……」

この世界では、ある一定の功績をあげ、人外の域に足を踏み入れた者を「英雄」と呼ぶ。その戦力は一人で百人力どころか万人力とまで言われる程。

デイストブルグ王国の守りを薄くしない為、また兵糧の関係や金銭的にも、今回の援軍に割ける兵数は多くて三〇〇〇前後が現実的となる。

国力を総動員すれば三万人は可能だろうが、今は一〇月。収穫前だ。不用意に人を割けない。

そして、「英雄」がアフィリス王家の敵側にいる限り、跡継ぎである長男は出せない。

それはあまりにリスクすぎる。

また次男である二歳上の兄上は、あまり身体が強くないので遠出には不向き。つまり、そういう理由で俺に白羽の矢が立ったというわけである。

「ですが」

しかしそこで、はいそうですか、とは言わないのが俺という人間。

「ファイリス王家側も、クズ王子の援軍を望んではないでしょう。ここは、姉上を立てるのはどうでしょう」

「あやつは他家に降嫁する事が決まっておる。もし死んでしまった時、ファイが代わりを務められるか?」

「……………無理です」

「であればお主しかおらん。なに、死にに行けと言っているわけではない」

父上の言う事はまさしく正論。

俺が言い訳をする余地が一切見当たらない。

「気負わなくてもよい。盟約に則り、援軍に向かうだけよ。ファイが前に出て戦う、必要などありはしない。ただ、王家の者が援軍に向かったという事実が大事なのだ」

「そう、ですね」

戦う。

その言葉を耳にした直後、俺の心に影が差した。

目をそらすように視線が下に落ち、物憂げな面持ちで思案を始めると同時に、思い起こされていく。

一人の哀れな剣士の生き様が。

色濃く焼き付けられた記憶が。

ひたすらに、剣を振るい続ける事しかできなかった一人の剣士がいた。

彼は幾千幾万もの人を斬り、その血で手を塗らしながらも、戦いの果てに頂きへと登りつめた。

けれど全てを眺望できるそこに辿り着いた時、彼は独りだった。望まずして得た頂点から見える景色は、孤独一色だった。

唯一の師を失い、それでも生きる為にと剣を振り続けた剣士の末路は、はてしなく続く孤独。

己を守る為にと必死に剣を振り続けた剣士は、最期には孤独に耐え切れず、自刃して果てたのだ。

故に彼は。

俺は、剣を握る事を嫌う。

「安心せい」

俺の歯切れの悪さが不安ゆえと判断したのか、珍しく慮るように父上が言う。

「今回は側そばにフェリも付ける。コヤツは騎士団の上位層とも斬り結むすべる程の実力者よ。フアイが心配することなど、何も無い」

「そうですね」

返事は冷淡れいたんになった。

感情かんじがこもらない。いや、込められない。

物語ものがたりに語り継つがれる英雄は何人も存在する。

しかし、全ての英雄の物語ものがたりが語り継つがれているわけではない。

山あり谷あり。そんな物語ものがたりが生まれ、特に後世にまで語り継つがれるのだ。エンディング

は、劇的げきてきである程に人々の記憶きおくに強く刻きまれる。

物語ものがたりを語る詩人が好むのも、その劇的げきてきな部分。

語り継つがれる英雄というものは、総そうじて非業ひげつの死を迎えている。

だが俺は、語り継つがれなくなつていい。名誉めいよなんて欲ほしくない。

栄光えいこうなんぞ何の価値かちもない。

平凡へんぺんな毎日にこそ、何にも勝まさる幸福しんぷがあるのだと俺は知っている。だから、今の俺は剣を握にぎらない。

「俺は……」

言葉を慎重しんじゆうに選ぶ。

戦争と耳にした瞬間から、剣士であった頃の色褪いろあせない記憶きおくがチラついて仕方がない。

が、それに左右さゆうされるつもりもない。

既すでにそれは、過去の話わだ。

今の俺は、クズ王子くすおうじ。それで十分。

クズ王子くすおうじ。らしく、振る舞まえばいい。ただそれだけだ。

「体裁ていさい上、向かうだけです。勝かちてないと判断すれば逃げますし、俺自身は武器を執とって戦う事もしません。元々、武器を扱あへませんし。もしかすると自分可愛かわさに逃げ帰かえつてくるやもしれません。それでも良ければ、その役目を引き受けましょう」

「……野心やんしんは芽生めえんか」

少しだけ、残念ざんねんそうに父上ちやうじやうが言う。

救援きゆうえんに行き、窮地きゆうちから救きうう事で、アフィリス王国の英雄いゆうになりたいとは思おもわないのか。

そういう意味いみだろう。

「ふふはっ」

笑わらう。

何を馬鹿ばかな事を、と俺は笑わらう。

「俺はクズ王子くすおうじですよ、父上ちやうじやう。分相応ぶんさうおうというものがあると教えてくれたのは、他でもない父上ちやうじやうじゃないですか。俺は、ひたすら平凡へんぺんな一日いちにちを迎えられればそれでいい」

そう言って、俺は立ち上がる。

「出立はいつです？ 明日か、明後日、明々後日あたりですかね。メイド長を使つてまで俺を呼び出したんだ。それだけ、マズい状況なんでしょう？ 俺は兎も角、向かう兵士達の数によっては、それなりに状況を覆せるかもしれないですしね」

「……可能ならば明朝にでも出立してほしい」

「分かりました。話もまとまった事ですし、俺はこれにて失礼します」

フェリを置いてその場を後にする。

「……こんな役目、押し付けちまって悪いな」

扉を開けたすぐの所で、俺に話しかけてくる青年がいた。

グレリア・ヘンゼ・デリストブルグ。

王位継承順位第一位。

次期国王と呼び声の高い、俺の兄上であった。

どうして兄上がここにいるのか。そんな疑問が生まれるも、そういえばラティファが王子王女全員に召集をと言っていたなと思いつく。

恐らく呼びかけに素直に応じない俺が最後に、他の姉妹は既に父上から用件を伝えられた後だったのだろう。

俺はそう自己解釈をしてから兄上へ返事をした。

「どうして兄上が謝るんですか」

「本来ならば、これはオレの役目だ。だが、父上はオレが向かう事を認めなかった」

「それはそうでしょう。兄上はこの国に欠かせないお人だ」

「だからといってお前が死んでいい人間なわけではない!! オレは知ってる。お前が、ファイが優しいヤツだという事は」

「……随分と高評価ですね。いいんですよ、そんな取り繕おうとしなくても」

「本当に、クス王子ならば、卑下するような事は言わん……死ぬなよファイ。怖くなつたら逃げ帰ってこい。オレが庇つてやる」

俺達兄弟の中でも特に、俺とグレリア兄上の仲は良すぎる。

俺からしてみれば、たまに相談に乗ったり、話を聞いたりしたくらいなんだが、兄上にとつて相談できる相手というのは得難いものだったらしい。

立場抜きにオレに本音をぶつけてくるヤツはお前が初めてだよ、と笑う兄上の笑顔が未だに忘れられない。

「兄上には俺が、戦争で死に花咲かせてくると言うような武人に見えましたか？」

「……く、くははっ。そう、だったな。悪い、無用心配だったな」

「伊達に、クス王子なんて呼ばれてませんか」

「お前は強いな」

「どうしてですか？」

儂く笑うグレリア兄上の言葉に疑問を抱く。

俺が強い人間？ そんな馬鹿な。俺程弱く、馬鹿な人間はいないだろうに。

「オレはさ。初めての戦争では、援軍の将として参加したんだ。勝ち戦だった。けど、震えが止まらなかった」

「ああ、そういう事ですか」

なるほどと、俺は微笑む。

グレリア兄上の震えは、当然の事だ。この上なく正しい反応だ、それは。人の死が蔓延る場所を思つて震える事は、正常に他ならない。

「俺は……」

少し言葉に詰まる。

何を言うのが正解なのか、少し迷い、僅かな逡巡を経て、

「俺は、馬鹿だから。戦場がどういった所なのか分かってないんだと思います。いざその時になったら震え出しちゃうかもしれません」

俺はグレリア兄上に嘘をついた。

戦争は、闘争は、俺の記憶にこびりついている。

震えるなんて事は、あり得ない。

それ程までに、俺という人間は壊れ切っていた。

「そう、か。困った時はフェリに指示を仰ぐといい。オレも何度か世話になっていな。

腕は保証する」

「それは頼もしいですね」

「フェリを付けるからには、父上もお前を死なせたくはないんだろう。あまり責めないでやってくれ」

「責めるだなんて、そんなつもり毛頭ありませんよ」

だつて俺は。

「誰かを責められるような人間じゃ、ありませんから」

救いようのない人間だという事を誰よりも、自覚しているのだから。

第三話 歓待

「ま、これが妥当だわな」

父上に役目を与えられ早一日。

飛行艇を使い、やってきたのはデイストブルグから見て北東に位置する——アフィリス

王国。

援軍を向かわせるという旨を書き記した書簡を父上が予め送り届けていたのか、早朝にもかかわらずその国境付近の荒地には、俺達を出迎えんとする兵士達でちよつとした人集りが生まれていた。

飛行艇が着陸するや否や、多くの兵士達が駆け寄ってきてくれたものの、こちらを取りまとめる者が、クズ王子であるを知った途端、目に見えて落胆の色が浮かんだ。

——グレリア殿下が来てくださったっていれば。

——勝てない戦いと踏んで、クズ王子を寄越したのか。

などなど。俺がいるというのに陰口がこちらから聞こえてくる。

盟約の下に援軍としてやってきた俺は、アフィリス王国の為に少なくとも一度は戦わなければならぬ。それが体裁というやつだ。

逆に言えば、一度でも戦ったなら、クズ王子が長く留まるわけがない。

なら、陰口の一つや二つ、言ってしまうっても問題はないだろう、というわけだ。

悲しいかな、俺としても長く留まるつもりはなかったもので、ここは笑うしかない。

「……殿下」

「どうしたよ。俺に同情なんてあんたらしくもない。陰口なんぞ言われ慣れてる事は知ってるだろ。今更どうも思わないさ。これは自分で蒔いた種だ。甘んじて受け入れるつ

ての」

隣のフェリにそう言ってやる。もちろん、本心からだ。

人から向けられる悪意には以前から慣れていたし、どうこう言うつもりもない。

ただ何もなく終わらさずすれば、俺から言う事は何も無いのだ。

「あんたも分かっているだろ。俺は置物だ。働くのは騎士や兵士達。彼らは、逃げる腹つもの、クズ王子より騎士達の機嫌を取って、少しでも留まってもらおうとしている。実に利己的。あそこまで目に見えてだと好感すら覚えるな」

「ですが、殿下を疎かにするなど到底許せる行為では……」

彼らも分かっているのだ。相手はかの有名なクズ王子。俺という存在はどこまでも据え置きでしかなく、ともに相手をする必要がないと、したところで意味はないと、分かっているのだ。

だからもういつそ、俺を放置してしまおう。全員が全員そんな思考をしているので、俺がぼつんと放っておかれていくような状況に陥っている。

「別に気にしなくてもいい。俺は気にしてない。っていうより、興味が無いからな、この国に」

「？」

「今回の件でのみの付き合いで、俺だっぴいざとなれば、逃げるつもりなんだ。あちら側

も俺が自分可愛さにおめおめ逃げ帰るような情けない、クズ王子^{クズ王子}って分かってるんだらうよ。そしてお互いにそれを理解してる。だから気をつかうだけ無駄なのさ」

「……どうして」

そう言ってフェリは顔を俯^{うつむ}かせながら、俺の考えが心底理解できないと言わんばかりの様子で、振り絞^{しぼ}るように、悲しそうに嘆^{なげ}く。彼女の表情はひどく歪^{ゆが}んでいた。

「どうして殿下は戦おうとしないんですか……っ。それだけ、利己的に己を失わず冷静でいられるのなら、良き戦士になれるでしょう。王族でも剣を執る時代です。実際に、グレリア殿下は剣士でもあります。腕を磨^{みが}いて、見返してやろうとは思わないのですか……！」

「思わない」

即答だった。

「まず前提として、俺は剣を振るう事を誉れと思っちゃいない。俺が望んでいるのはひたすら続く平和な日常だ。崇められたり、褒められたり、栄光を掴んだり、英雄になったり、国を救ったり。そういった行為は以ての外^{ほか}で、一切興味が無いんだよ。俺の場合、クズ王子^{クズ王子}と呼ばれる事さえ受け入れれば平和な日常がやってくる。なら、俺はそれを甘受^{かんじゅ}してやるさ」

それは、俺と先生を除^{のぞ}いて誰にも理解されない考え。

剣を握り、その果てに辿り着いた場所は、ただ己が斬り殺した骸^{むくろ}が広がり、ひたすらに無^なが続く孤独の一带。

そこに辿り着き、それを誰よりも理解した一人であるからこそ、俺は剣を握らない。少なくとも、真に守りたいと思えるものすらないこの地で、俺が剣を握る事は、あり得ない。

俺はもう、剣士ではないのだから。

「考えが甘すぎます、殿下っ……!!!」

「甘くて結構。だがな、剣を握れば最後。人は剣に呑^のまれる事しか選択肢がなくなる」

「……どういう事ですか」

「そのままさ。剣を握った瞬間、人は錯覚^{さくかく}を起こす。まるで自分が強くなったかのような錯覚だ。それが死への第一歩。人殺しの武器を当たり前のように振るうようになればもう戻れない。後は、死へ続く道をひたすら真^まっ直^すぐ進むしかなくなる。剣を握る事を誉れとする時点で、この世界は平和から程遠^{ほどとほ}いよ、本当に」

フェリが俯^{うつ}く。

だけど、俺は自分の身を案じて助言してくれた彼女を言い負かしたかったわけではない。「この世界を生きる上では、あなたの意見の方が正しい。だけど、戦争をなくしたいのならば俺の意見の方が正しい。あなたは王家への忠誠心が高いから、仕^{つか}えてる相手がどんなに救いようのない人間でも、バカにされるとそりゃ腹も立つよな。その忠義^{ちゅうぎ}には、いつか

報いてやりたいもんだ」
本心から、そう思う。

彼女は数十年とデイストブルグ王家に仕える忠臣の一人だ。デイストブルグ王家の者ならば、どんなカタチであれ、その忠義には報いなければいけないだろう。

「では、殿下。剣を執りましょう。私が必ずや殿下をデイストブルグ王家の名に恥じない剣士に育ててみせますので!!」

「すまないが、それだけは勘弁」

「むむ……」

訂正。

可能な限り、報いてやりたいと思う……

「そら、こうしてる間にやっとお出ましか」

動きにくそうな煌びやかな衣装でなく、戦乙女のような身軽な格好で、こちらへ向かってくる一人の女性を見据えながら俺は言う。

「メフィア・ツヴァイ・アフィリス王女殿下……」

彼女の顔に浮かぶ隠しきれない疲労を慮ってか、フェリの声に込められた感情は少し沈んでいた。

「お久しぶりね、八年振りかしら。ファイ王子」

「俺としては、部屋でゆっくりしていたかったんだけどな。グレリア兄上が行けないって事で俺が代わりに来た。別に気にしないぞ? なんでグレリア兄上じゃないんだって喚いてもよ」

「喚けばグレリア王子殿下が来てくれるのかしら」

「来ると思うか?」

「……はあ。無駄に時間を使わせないで。本当にマズい状況なの。悪いけど、今から戦線に加わってもらおうわ」

これ以上の会話は必要ないとばかりに、メフィアは俺から視線を外す。その視線の先には俺達が連れてきた兵士達、総勢三〇〇〇。

メフィアは彼らに向けて声を張り上げる。

「今、城の西から敵軍が迫っています。あなた達には今からそちらに向かってもらうわ! その為に、一時的に私の指揮下に入ってもらおう。異論はないわね?」

ざろりと威圧の込められた視線を向けられる。

俺の身の安全が保証されなくなるからと、断わられないように。そんな考えの表れだったんだろうが、生憎と殺意を向けられるのには慣れている。暖簾に腕押しだ。

だけれど、断る理由もなかったので、俺は分かったと頷く。

「だが、フェリは俺の護衛だ。フェリだけは俺の側に置いておく。それで構わないか?」

「構わないわ」

「そりゃどーも」

俺にとつて、守りたいヤツは俺自身とフェリくらいだ。それに、一人ぐらいであれば剣を握らずとも十分逃し切れる。

フェリは苦手な人物ではあるが、嫌いな人物ではない。クズ王子^{クズ王子}な俺でも見捨てないでくれている大切な臣下の一人だ。

手からこぼれ落ちさせたくないならば、手元に置いておくに限る。先生の教えだ。

前世では守るヤツどころか、知人すら両の手の指の数よりも少なく、その言葉を実践する事はなかったが。

「別に、一人じゃなくて五人くらい側に置いて構わないのよ？」

「いや、メイド長……フェリだけでいい」

「あら、そう」

飛行艇の中で、散々、クズ王子^{クズ王子}だなんだと陰口を叩いてきたようなヤツらを側に置く気にはなれないし、俺は元々、側に人を置かない人間だ。

メフィアは俺が自分の保全の為にフェリを側に置くと思っただらうが、あえてそれは訂正しない。

「恐怖^{恐怖}なんてモノは、随分前に捨ててきた。俺がそう言ったとしても、その言葉を信じるヤツは俺と先生くらいだろうから。
騎士達に作戦内容が伝えられていく中、俺はメフィアに声をかけた。

「実際問題、戦況はどうなんだ。言葉を濁すなよ。それを話す事は、一応でも援軍に来た者に対する礼儀だ」

「戦況自体は、まだそこまで悪くないわ。でも」

そこでメフィアは言葉に詰まる。

いや、言わんとする事は俺でも理解できた。

「英雄^{英雄}、か」

「そう、それが問題なのよ」

一人いれば万人力。二人いれば国が落ちると言われる「英雄^{英雄}」という存在。

彼らがいるという事実だけで相手の兵士の士気は上がり、こちらの士気は下がる。まさに理不^{理不}尽の塊^塊だ。

「実際、見たから分かるの」

何かを悟^悟った様子^{様子}で。

「英雄^{英雄}には、勝てない」

彼女は、そう断言^{断言}した。

「驚^{おぞ}いた」

「全然、驚いたようには見えないけど、なんで驚いたの？」

「いや、なに。猪突猛進なメフィア王女殿下が勝てないと断言するなんてな、と思って」
「相対すれば分かるわ。あれはもう、人間じゃない」

別に俺は、メフィアという人間に興味はない。

だが、敵わないと思つた程度で諦めるような人間だったかと、俺の記憶に残る彼女と今の彼女を比べた時、言葉にし難い違和感に襲われた。

「そうか」

これ以上、話す事は何もない。

俺はここで話を切つた。

人という生き物は、希望に、奇跡に縋る。

それは信仰というカタチで表れたりする。奇跡なるものがあると信じている者は多い。

だが、大半の人間は、それが自分の力では起こせないと断定してしまつている。神のよ
うな形而上の存在にしか実現は不可能、と決めつけてしまつている。

しかし以前の世界では、敵わないと悟つて尚、挑む者が大半を占めていた。

一矢報いてやるのだと、手をもがれ、胸に穴が空いていても、身体が動く限り、殺す手
を休めない。そうして、奇跡を体現していた。

俺も、その一人だった。

女だから。そんな事は戦いにおいて、瑣末でしかない。

どんな逆境にあつたとしても、諦めない心を持つ者だけが奇跡に恵まれる。

その事実を知る俺だからこそ、早々に勝てないと決めつけてしまふのは如何なものな
のかとふと思つてしまつた。まだ身体は動くだろうにと、そんな血腥い感想を抱いてし
まつた。

「そうだ、ファイ王子。貴方、戦えるの？」

「戦えると思うか？」

「……不要な問答をさせないで」

「戦えねえよ。というより、戦う気がない」

「物は言いようね」

「おいおい、どう見たつて負け戦だつてのにやる気に満ち溢れてるヤツがいたら、そいつ
は異常者か、余程の自信過剰だな」

「……貴方、今なんて言つた？」

空気に緊張が走る。

怒つているという事は理解ができる。

が、俺は事実を言つたに過ぎない。罪悪感は一切なく、もう一度言う事に躊躇いはな
かつた。

「負け戦だつて言った」

「貴方という人は……っ!!」

女性とは思えない力で胸倉むなぐらを掴まれる。

周りがなんだなんだとこちらに視線を向けてくるが、俺はお構いなしに言つてやる。

「指揮官が打ちのめされてる時点でこの戦いは勝てねえよ。あんたらの疲労具合から、優勢でない事は俺にも分かる。それに俺は、あんたらと心中しに来たわけじゃねえ。悪いが、一戦交えたら帰らせてもらう」

「勝てそうにないからつて、親交ある国を見捨てて帰るつていうの!? 連れてきた部隊が壊滅かいめつしたわけでもないのに!? ふざけないで……!!」

これでも俺は一国の王子という立場だ。

普段はクズ王子と呼ばれてはいるが、いざという時に限つては親交を重んじる変わった性格をしているとでも、彼女は思つていたのだろうか。

「じゃあなんだ。あんたは俺にアフィリス王国に骨を埋めろと言いたいのか?」

「そんな事は言つてないわよ……っ」

「はつきり言えはいいだろ。兵だけは置いていつてくれつてな。別に俺は、兵の中にアフィリス王国に残つて骨を埋めたいという変わり者がいるならば、無理に止めはしないが……」

そう言つて、連れてきた兵士に目をやると、皆があからさまに目を背ける。

「と、いうわけだ。一応、アフィリス王国の国王にも伝えに行く」

「軟禁かんきんされても知らないわよ」

「もちろん言葉は選ぶ。だが、俺が軟禁された時点で、この兵達は裏切るかもしれない不安要素に変わつてしまう。そんなものを懐なつかに抱かかえられる程、アフィリス王国に余裕があるとは思えないな」

「裏切れば王子を殺すと云つたら?」

「クズ王子クズおうじに価値があるとでも? 残念ながら毛程けほどもねえよ」

今から西方面の救援に向かう。

そしてそれが終われば王との対面。

その次の日の早朝に、俺達はデイストブルグ王国に帰るといふわけだ。

援軍に向かった部隊は数ヶ月留まるのが常であるが、別に一日だとしても救援に向かった事実は事実だ。盟約に背く事にはなり得ない。

「今の状況について詳しく教えろ」

「……ひと月以上前から籠城ろうじやうを続けているわ。食料や兵士達の疲弊ひへい具合からして、一刻の猶予ゆうよもないわね」

「どうしてそうなるまで放つておいた」

「ある戦線のせいで、身動きがとれなかったのよ……」
 眉根を寄せ、苦虫を噛み潰したような表情のメフィアの口から、言葉が絞り出される。その様子から、そちらも芳しい結果でなかった事は、容易に想像できた。けれど俺は構わず質問を続ける。

「ちなみにそこはどうなった」

「英雄の手によって散々に荒らされて兵の大部分を失った挙句、惨敗よ。そのおかげで私も休む暇がないわ」

「なるほど、な。ひと月もこもってるなら、相手の方もそこそこ疲労が溜まってるだろう。相手の兵数は？」

「約二〇〇〇。かなり多いわ……」

いや。相手は疲弊した二〇〇〇程の兵士。

ひと月もの間、満足な衣食住がなかった事で、精神的にも疲れが生じてるはず。対してこちらにはデイストブルグから連れてきた万全の状態の兵士三〇〇〇。

まあ、負ける事はないだろう。

俺はそう判断して、メフィアが向かおうとしていたのとは違う方向に足を向ける。

「メフィア王女。俺は今から王に挨拶に行く」

「……貴方、何考えてるの」

「もちろん、兵は置いていく。コイツらは今回に限りあんたの指揮下に入る。その代わりに一人、王城への案内役が欲しい」

「そんなに我が身が大事？」

「何を勘違いしてるかは知らんが、高確率で勝てる戦いに、俺という置物はいらんだろう。元より、俺は戦う気がない。兵士もメフィア王女の指揮下に置く。だというのに俺が必要か？」

「それは……」

「俺には俺の役目がある。それを果たすだけだ。さ、案内人を一人、寄越してくれるか」

俺に対して散々陰口を叩いていた兵士の連中であるが、俺の身を案じたグレリア兄上の厚意により、騎士団の連中が何人か交じっている。

騎士団所属の連中は精鋭。疲弊した二〇〇〇の兵士ごときに後れはとらない。

「……分かったわ」

「時間は無駄にできない。賢明な判断だ」

こうして俺は、フェリと案内役の一人を伴って、王城へ足を運ぶ事になった。

第四話 王の全話

「どうしても、ダメか。ファイ君」

「俺が死んで困るのはアフィリス王国側ですよ。それでも留まらせたい程に、状況はマズいですか……」

アフィリス王国現国王。

レリック・ツヴァイ・アフィリス。

訳あって少し付き合いのあった俺とレリック国王との会話は、叔父と甥のもののようにあり、お互いが相手を気遣うように言葉を選んでいた。

「マズい。ひと月以上前の戦闘で、英雄の手によって兵の大部分が失われ、兵は少しでも多く欲しいのが現状なんだ……っ」

「やめてくださいレリックさん。そんな言い方、他国の王子に向けるものじゃない。足下を見られますよ……」

「そうしてでも。そうしてでもどうにかしなければならぬ程に追い詰められている状況だ……」

「……ですが、俺が国に帰り、父上に援軍の再構成を頼む方法が一番だと——」

「思います——そう言い切る前に、レリックさんが言葉を遮る。」

「それでは、時間が足りない」

「俺のようなヤツが頭であるより、国から將軍クラスを派遣してもらった方が良いに決まってる」

「普通であればその考えは正しいが、今回はかりは領けない」

自嘲気味にレリックさんが笑い、俯く。

「崩壊した戦線には、アフィリス王国随一の戦術家であった將軍を頭に置いていた。経験も豊富だった。しかし、その結果がこれだよ。この現状だよ」

「……」

二の句が継げなくなる。

アフィリス王国は大国だ。その將軍が、愚図なわけがない。

その人が指揮して尚、歯が立たなかったとレリックさんは言う。

「私はね、ファイ君が、クズ王子だなんて思った事は一度だってない」

知ってる。

そんな事は知っている。

家族や家臣を除いて、唯一俺を気にかけてくれていたのはレリックさんだけだったから。